

〈論 文〉

古文敬語の図解

阿久津 智

要 旨

本稿では、市販の教材類で古文の敬語がどのように図解されているかを概観し、それぞれの図解にどのような敬語のとらえ方が反映されているかを探るとともに、古文を読むことを考えた場合、どのように図解すれば敬語がとらえやすくなるのかについて検討し、その結果に基づく図解法を試みた。その図解法において重視した点は、(1)身分の上下や敬語の使い方に合わせて、関係する人物を上下に配置すること、(2)敬意の対象となる人物を、話し手の上位に配置することである。(1)は、身分の上下が敬語の使用に反映することを示すためであり、(2)は、どの人物に敬語を使うか（上位に待遇するか）を示すためである。

キーワード：敬語，図解，尊敬語，謙讓語，丁寧語

1. はじめに

本稿では、古文や古典文法の教材・参考書・辞書など（以下「教材類」）における敬語の図解について、考えていく。

まず、市販の教材類で古文（古典文法）の敬語がどのように図解されているかを概観し（2節）、次に、それぞれの図解にどのような敬語のとらえ方（敬語論・敬語観）が反映されているかを探るとともに、古文を読むことを考えた場合、どう図解すれば敬語がとらえやすくなるのかについて検討し（3節）、最後に、その結果に基づく図解法を示してみたい（4節）。

2. 教材類における敬語の図解

敬語の図解というのは、たとえば、次のようなものである（図1）。

これは、高等学校国語科用教科書（『国語総合』教育出版 2020: 277）に載っている、「三つの敬語」（尊敬語・謙讓語・丁寧語）を示した図である。

真ん中の△は、言語によるコミュニケーションを成立させる3つの要素（中村ほか 2002: 389-390）、すなわち、「話し手（書き手）」、「聞き手（読み手）」、「話題」を結んでいる。その上の□は「話題」（話の内容）で、そこには、「動作」（例：「見る」）を行う「主体」（為手）、その「動作」を受ける「客体」（受け手）、「動作」の方向を示す矢印が描かれている。①～③の矢印付きの破線は、「話し手（書き手）からの敬意の方向」で、それぞれ、①話し手（書き手）から主体への敬意、②話し手（書き手）から

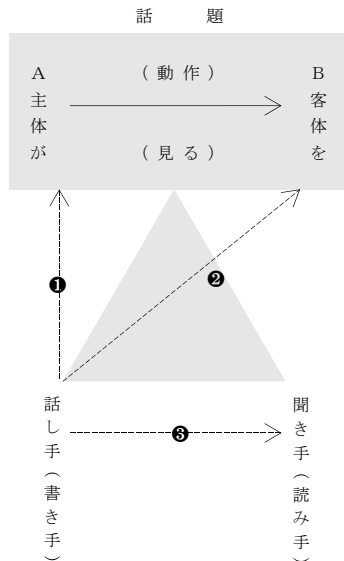


図1 3つの敬語の図示

客体への敬意, ③話し手（書き手）から聞き手（読み手）への敬意, を表している。それぞれの敬語表現が, ①尊敬語（為手尊敬）, ②謙讓語（受手尊敬）, ③丁寧語（聞き手尊敬）となる。

この教科書には, 次のような例文が挙げられている。下線部は, それぞれ, ①尊敬語, ②謙讓語, ③丁寧語の補助動詞である。

- ① (A が B を) 見給ふ。
- ② (A が B を) 見奉る。
- ③ (A が B を) 見侍り。

図1では, 尊敬語・謙讓語・丁寧語が1つの図にまとめられているが, 教材類では, これらは別々に図解されることが多い。ただし, その基本となっているのは, ほぼ図1のような形である。

多くの教材類における敬語の図解には共通点が見られる。参照した教材類（敬語の図解のあるもの）に共通するのは, 以下の点である（参照した教材類は, 稿末に挙げる）。

- (a) 敬語は, 基本的に, 尊敬語・謙讓語・丁寧語の3種類に分けられている。
- (b) 話題（吹き出し）の下に, 話し手（書き手）が描かれている。
- (c) 話し手（書き手）から敬意の対象に向けた「敬意」の線が描かれている。
- (d) 尊敬語では, 話題（吹き出し）の中に, 動作を行う人（主体）が描かれている。
- (e) 謙讓語では, 話題（吹き出し）の中に, 動作を行う人（主体）と動作を受ける人（客体）が描かれ, 主体から客体に向けて動作の方向を示す線が描かれている。

(f) 丁寧語では、話題（吹き出し）の下に、聞き手（読み手）が描かれている。

以上の最小限の要素だけを図示すると、図2のような図解になる（左右が逆になることもある。矢印付きの破線は敬意の向かう先を示す。「話し手」は、書き手を含み、「聞き手」は、読み手を含む。語の例を「」で載せる。以下同じ）。

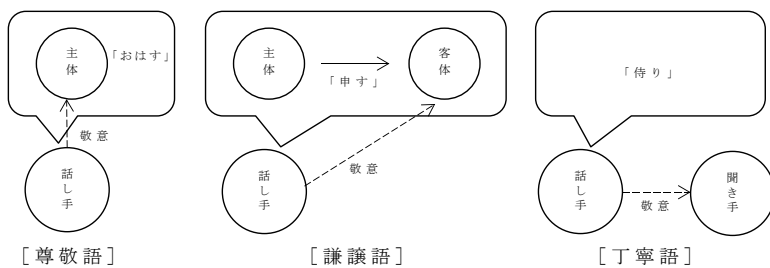


図2 敬語の図解（最小限の要素）

一方、教材類によって異なる点については、主なものを個別に見ていきたい（図2と異なるものを挙げる。教材類には、人物を平安貴族などのイラストで示しているものもあるが、ここでは単純化して示す）。

(A) 尊敬語と謙譲語の図に聞き手を入れる。

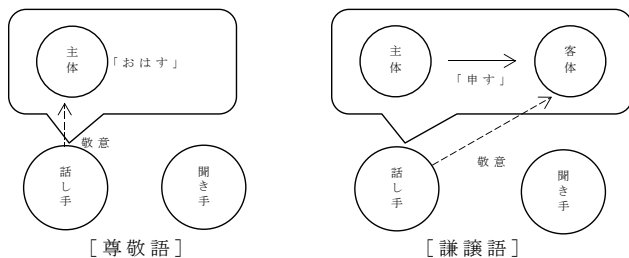


図3 聞き手を入れた尊敬語・謙譲語の図

尊敬語と謙讓語の図に聞き手を入れているものは多い。話し手と聞き手との間に「伝達」の矢印線を入れているものもある。その場合、主体から客体に向かう線に「動作」と書かれ、話し手から聞き手に向かう線に「伝達」と書かれることが多い（北原 1992, 中村 1992, 沖森 2012）。

(B) 尊敬語の図に客体を入れる。

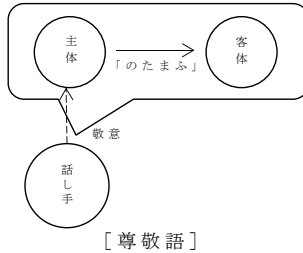


図4 客体を入れた尊敬語の図

尊敬語の図に客体を入れているものは多い。主体を上位に、客体を下位に位置づけている図もある（田辺 1986, 荻野 2010）。

(C) 謙讓語の図で、客体と主体との位置関係を上下にする。

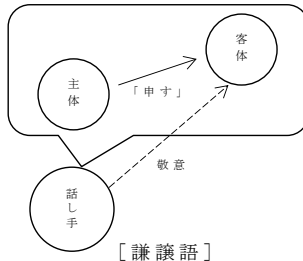


図5 客体と主体とを上下（斜め上下）にした謙讓語の図

客体と主体とを上下に配置しているものは、以下に述べる (E) の形を

除くと、多くはない（林・安藤 2017）。

(D) 丁寧語の図で、話し手と聞き手との位置関係を上下にする。

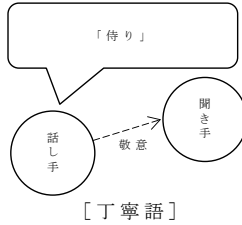


図6 聞き手と話し手とを上下（斜め上下）にした丁寧語の図

話し手と聞き手とを上下に配置しているものは、それほど多くはない（北原 1992, 宮越ほか 2021）。

(E) 敬意の対象となる人物を高める（位置を上げる）形で示す。

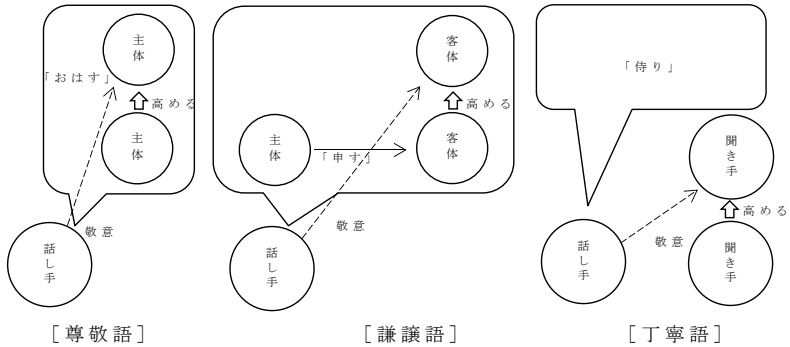
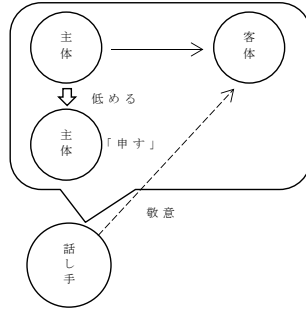


図7 敬意の対象となる人物を高める図

敬意の対象となる人物を高める図解をしているものも見られる（田辺 1986, 中村 1992, 沖森 2012）。高める前の位置に普通語（例：あり，言ふ，あり）を，高めた後の位置に敬語（例：おはす，申す，侍り）を書き

入れているものもある（沖森 2012）。

(F) 謙譲語の図で、動作主体を低める（位置を下げる）形で示す。



[謙譲語]

図8 動作主体を低める謙譲語の図

主体を「低める」（位置を下げる）形にしているものは少ない（田辺 1986）。

(G) 例を入れる場合、吹き出しの外に書く。

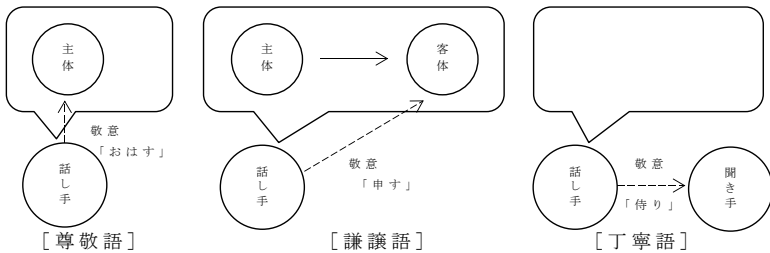


図9 例を吹き出しの外に書いた図

例を入れる位置にはさまざまなものが見られる。上の図では、語の例を、吹き出しの外の、敬意を示す矢印線の近くに書いている（市川・山内

2018)。例を吹き出しの中を書く場合は，敬意の対象の近くを書く（沖森 2012），動作主体の近くを書く（田辺 1986），動作の方向を示す矢印線の近くを書く（林・安藤 2017），そのいずれでもなく端のほうに書く（宮腰ほか 2021），などがある。

以上の (A)～(G) は，基本的な敬語表現に関する図解であるが，「注意すべき敬語表現」（「特別な敬語表現」）を挙げて，別に図解を行っている教材類もある。以下に主なものを挙げる。

(H) 二方向（二方面）に対する敬語（謙譲語 + 尊敬語）の図を掲げる。

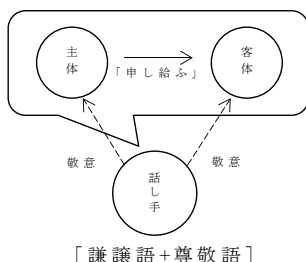


図 10 二方向に対する敬語（謙譲語 + 尊敬語）の図

二方向に対する敬語（謙譲語 + 尊敬語）の図を掲げている教材類は多い。「謙譲語 + 尊敬語」の表現（例：申し給ふ）を謙譲語（申す）と尊敬語（給ふ）とに分けて，それぞれを，客体，主体に向かう敬意の矢印線の近くを書いているものが多い（北原 1992，萩野 2010，塚原 2010，青木ほか 2012，市川・山内 2018）。図を，謙譲語の部分と尊敬語の部分とに分けているものもある（中村 1992）。客体と主体とを，上下に配置しているものもある（林・安藤 2017）。

(I) 二方向（二方面）に対する敬語（謙讓語＋丁寧語）の図を掲げる。

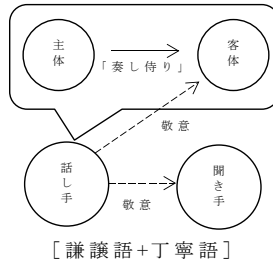


図 11 二方向に対する敬語（謙讓語＋丁寧語）の図

二方向に対する敬語には、「謙讓語＋丁寧語」のものもあり、その図を掲げている教材類もある（沖森 2012）。

(J) 最高敬語や絶対敬語の図を掲げる。

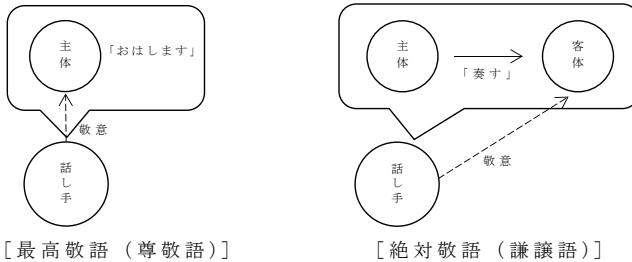


図 12 最高敬語と絶対敬語の図

最高敬語・絶対敬語の図を挙げているものもある。最高敬語（二重尊敬）の図解は、一般の尊敬語のもの（図 2 参照）と変わらない（市川・山内 2020, 宮腰ほか 2021）。いわゆる「絶対敬語」（謙讓語の最高敬語）の図解は、一般の謙讓語のもの（図 2 参照）と変わらない（宮腰ほか 2021）。

(K) 自敬表現の図を掲げる。

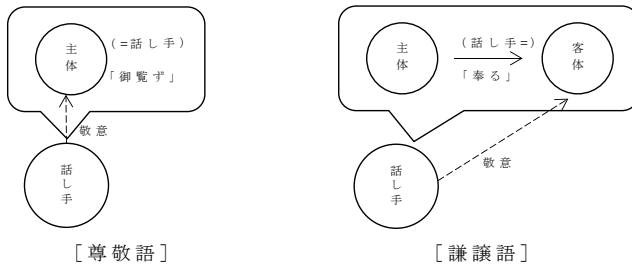


図13 自敬表現の図

自敬表現（自尊敬語）を挙げているものもある。この図解は、一般の尊敬語・謙譲語のもの（図2参照）と変わらない（宮腰ほか2021）。

(L) 補助動詞「給ふる」（下二段活用の「給ふ」）の図を掲げる。

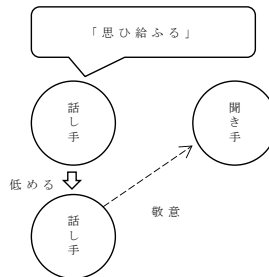


図14 「給ふる」の図

上の図のように、「給ふる」（自己卑下の敬語）を他の謙譲語とは別に（「謙譲語Ⅱ」などと呼んで）、動作主である話し手がへりくだる表現として扱って、話し手を低める（位置を下げる）形で図示しているものがある（中村1992）。

以上、教材類に見られる敬語の図解を概観した。こういった図解には、敬語に関するとらえ方（敬語論・敬語観）が反映していると思われる。そこで、次節以降で、これらの図解に見られる敬語のとらえ方を探るとともに、古文の読解を考える場合、どのような図解が実用的なのかについて、考えていきたい。

3. 図解法と敬語論・敬語観

2節で取り上げた敬語の図解で基本となるのは、図1と図2である。図1では、□で話題が示され、△で、話し手・聞き手・話題（素材）の結びつき（言語の成立条件）が示されている。図2には、話題の人物に対する敬語（尊敬語・謙譲語）と、聞き手に対する敬語（丁寧語）とが示されている。こういった要素・領域の設定は、「敬語の本質について、はじめて深い考察を加えた」（北原 1996: 198）とされる時枝誠記の言語論・敬語論に始まるものである。時枝の敬語観の特徴は、次の言に現れている。

- (01) 敬語には二の領域があつて、一は言語主体の直接的表現に属するものであつて、敬意の対象は明白に場面即ち聴手である。二は、場面の制約に基づくものではあるが、素材の認識把握の仕方に関するものであつて、その根柢には素材に対する上下尊卑の関係に対する識別が存し、その故にこれ亦敬語と称することが出来るが、ある対象に対して敬意を表現しているというものではない。（時枝 2007: 151）

時枝は、敬語を、（一）聞き手に対するもの（「辞に属する敬語」）と、（二）素材に対するもの（「詞に属する敬語」）とに二分し、話し手（言語主体）の敬意は、聞き手に対する敬語（丁寧語に相当。辻村 1967 の「対

者敬語」)のみに現れ、素材に対する敬語(尊敬語・謙讓語に相当、辻村1967の「素材敬語」)は、話し手の敬意の表現ではなく、「素材の認識把握の仕方」を表すものとしている。

時枝は、さらに、(二)の敬語を、尊敬語に相当する「話題とされる事物事柄に関与する人物と、話し手との関係を表現する敬語」と、謙讓語に相当する「話題とされる事物事柄と、それに関与する人物相互の関係を表現する敬語」とに分けている(時枝2020:374)。

このような時枝の敬語観は、その後の敬語研究に大きな影響を与え、今日の教材類の図解にもその影響が見られるが、尊敬語や謙讓語が話し手の敬意を表すものではないとする考えについては、今日では、否定的な見方が有力である(北原1996:201など)。これは、教材類の尊敬語・謙讓語の図解に、「敬意」が必ず示されていることからもうかがえる。

ここで、「敬意」の定義について述べておくと、たとえば、「社会的・身分的に上位に待遇しようとする意識を「敬意」「尊敬」と呼ぶ(敬意の対象者の人格を尊敬しているという意味では、必ずしも、ない)。(小田2022:90)などとされる。現代語に関する「敬語の指針」(文化審議会答申2007:4)では、「上位に待遇する」ことを「立てる」といっている。「立てる」とは、「言葉の上で人物を高く位置付けて述べる」ことである。時枝敬語論では、独自の言語観(言語過程説)から、素材に対する敬語(尊敬語・謙讓語)を敬意の表現と認めないが、時枝のいう「素材に対する上下尊卑の関係に対する識別」こそ「上位に待遇しようとする意識」(=敬意)に結びつくものであり、敬語を包括的に扱うことを考えれば、いずれの敬語も敬意の表現として扱うべきであろう。また、「敬語的意味を実現させる敬語使用そのものに敬意の表現がある」(大石1983:18)とする見方などもある。

ところで、古典敬語の中心は、平安時代の敬語である。平安時代の敬語は、「厳重な身分制度における上下関係」に基づく「社会的身分秩序を言

語的に表現する礼儀作法」（西田 1989: 102）であり、「敬語と身分との間に密接な関係がある」（玉上 1966: 26）、「敬意の対象となる人物はその表現者より社会的身分が上位である」（渡辺 1981: 140）とされる。つまり、平安時代の敬語は、身分の上下関係の反映であり、話し手より上位の人に対して使われるということになる。

以上を踏まえて、以下、2 節の(A)~(L)について、見ていく。

(A) 尊敬語と謙讓語の図に聞き手を入れる。

聞き手は、言語コミュニケーションを成立させる 3 要素（話し手、聞き手、話題）の 1 つであるが、尊敬語と謙讓語とは、話題の人物に対する敬語であるため、簡潔さを求めるなら、尊敬語と謙讓語の図解に聞き手の記載は必要ない。ただし、丁寧語を含め、さまざまな敬語を同じ枠組みで統一的に図解することを考えるなら、聞き手を入れる必要があるだろう。

(B) 尊敬語の図に客体を入れる。

尊敬語は、「上位者の動作・状態を他者と関係なく絶対的なものとして表わすもの」（絶対敬称）と、「上位者の動作・状態を他者に（恩惠的）関係を持つものとして表わすもの」（関係敬称）とに分けて扱われることがある（辻村 1967: 108, 山田 1924: 44）が、話題に主体（為手）と客体（受け手）とが現れる場合、敬意の対象である主体の身分が客体より上位でなければ尊敬語が使えないというわけではない。主体が客体より上位でないが使えない動詞は、「召す」、「御覧ず」、「賜ふ」などに限られる（小田 2022: 103）ので、尊敬語の図解を行う際に客体を入れるどうかは、状況に応じて判断すればよいであろう。

(C) 謙讓語の図で、客体と主体との位置関係を上下にする。

『源氏物語』においては、「『謙讓』表現における為手と受け手との上下関係は、基本的には「為手（下位）＜受け手（上位）」である。」（杉崎 1971: 144）とされる。謙讓語には身分の上下が反映されるので、客体（受

け手)と主体(為手)とを上下に配置したほうがわかりやすいであろう。横並びにした場合には、敬語の必要性や、敬意の方向の必然性が見えにくくなってしまう。

(D) 丁寧語の図で、話し手と聞き手との位置関係を上下にする。

これも、(C)と同様に、敬語の必要性や、敬意の方向の必然性を示すためには、聞き手と話し手とを上下に配置したほうが伝わりやすいと思われる。ただし、平安時代は、まだ丁寧語(聞き手尊敬)が十分に発達しておらず、丁寧語(謙讓語Ⅱ)から丁寧語への過渡期であったとされる(宮地 1981: 11-12, 森山 2013: 207)。その図解は、「話し手 = 主体」のものが中心となるであろう。

(E) 敬意の対象となる人物を高める(位置を上げる)形で示す。

図解することの必要性からすると、図に普通語(低い位置)を入れて、敬語(高い位置)と対応させるのであれば、両者の違いがわかり、有効であろうが、普通語を入れないのであれば、敬意の対象となる人物を上配置するだけで十分ではないかと思われる。

(F) 謙讓語の図で、動作主体を低める(位置を下げる)形で示す。

謙讓語の図で、主体を「低める」形にするのは、謙讓語をへりくだりの表現ととらえているからであろう。しかし、古典の謙讓語は(後述する(L)などを除き)、「客体尊称」(松下 1928: 378)、「受手尊敬」(玉上 1959: 213)、「対象尊敬」(馬淵 1963: 160)、「客体上位語」(辻村 1992: 93)、「補語尊敬語」(小田 2020: 352)などと呼ばれるように、主体を低めるものではなく、話し手の敬意が動作の客体に向かう敬語と見るのが一般的であり、これに従えば、主体を低めて示す必要はないであろう。

(G) 例を入れる場合、吹き出しの外に書く。

例(動詞)を書き入れる位置にはさまざまなものがあるが、その効果は一様ではないと思われる。とくに謙讓語の場合は、敬意の対象である客体の近くに動詞を書くと、客体の動作だと誤解されかねない。文の意味をつ

かませることを考えれば、動詞を動作主体の近くを書き、敬意の対象は別に示すほうがわかりやすいであろう。

(H) 二方向（二方面）に対する敬語（謙讓語＋尊敬語）の図を掲げる。

「謙讓語＋尊敬語」は、主体（為手）と客体（受け手）の両者を敬意の対象とする表現である。この表現が使われるのは、「その受け手が話し手にとって敬うべき対象である」と意識するとともに、為手にとっても、より上位の人、あるいはなおざりにできない程の身分の人のはずと話し手が意識している場合」（杉崎 1971: 336）、「その客体が、主体とほぼ同格に近い、身分格差の少ない時」（杉崎 1994: 23）に限られる。主体（主語）と客体（補語）との関係では、客体が上位者で、主体が下位者である場合に使用されることが多いが（渡辺 1981: 151）、逆の場合もあり、「申す」を用いる場合などを除き、「主語と補語との間に、上下関係の制約はない」（小田 2022: 100）とされる。主体（為手）が客体（受け手）より上位者となるのは、『源氏物語』では、「為手が帝・院、ときに東宮・后である場合に限られる」（渡辺 1981: 156）。こういったことから、この表現の図解は、客体と主体とを上下に配置するのが基本とし、状況によっては、横並びにするというのが実用的ではないかと思われる。

(I) 二方向（二方面）に対する敬語（謙讓語＋丁寧語）の図を掲げる。

「謙讓語＋丁寧語」は、平安時代では、主に「侍り」を用いた表現になる。「侍り」は、本来「人（や神）の勢力の支配下にある如き意識」を表す「被支配待遇」（石坂 1944: 313）の語であったが、『源氏物語』では、「かしこまりあらたまつた」場面で、「基本的には、自己（自己側）の動作・存在」に用いられている（杉崎 1971: 342-343）。さらに、『枕草子』などでは、自然物を主語とする場合などにも用いられており、丁寧語（対者敬語）としての「侍り」も成立していたとされる（森山 2013: 207-208）。図解する場合は、「話し手＝主体」とするのが中心となるであろう。

(J) 最高敬語や絶対敬語の図を掲げる。

(K) 自敬表現の図を掲げる。

(J)と(K)については、一括して述べる。「最高敬語」は、「地の文で最高階級の人々のみにつく特別の敬語」(玉上 1959: 209)で、「おはします」(<おはし+ます)、「のたまはす」(<のたまは+す)、「せ給ふ」(<せ+たまふ)などの「二重敬語」をいう(ただし、玉上 1959: 210 は、「せ給ふ」のみを「二重敬語」と呼んでいる)。「絶対敬語」は、「最高階級の人々以外には絶対につかない敬語」,「帝・后・東宮・院を受手とした場合の言い方」で、「奏す」,「啓す」の2語をいう(玉上 1959: 216)。ここでいう「絶対敬語」は、諸言語の敬語を類型化するという「絶対敬語」(金田一 1942: 300, 澤田 2022: 114)とは異なる。「自敬表現」は、話し手が話し手自身に対して敬意を表す場合の敬語をいう。教材類では、これらの図解は、基本的に、一般の尊敬語・謙讓語と変わらない。これらを一般のものとするには、上下に段階を設ける必要があるであろう。たとえば、『源氏物語』の敬語については、「最高段階」,「中間段階」,「最低段階」(玉上 1959: 209)、「SA・A・Bクラス分け」(渡辺 1981: 142)、「最高尊敬待遇、普通尊敬待遇、「らる」待遇」(永田 2001: 284)など、いくつかの段階が考えられている。図に段階を取り入れることも考えられる。

(L) 補助動詞「給ふる」(下二段活用の「給ふ」)の図を掲げる。

「給ふる」は、「自己(まれに自己側)の「思ふ」「見る」「聞く」「知る」動作をへりくだって表わすもの」(杉崎 1971: 341)、「自分が心に思い判断することを卑下して相対的に聞き手を敬う特殊な敬語」で、「自己卑下の敬語」(玉上 1959: 219-220)、「自卑敬語」(小田 2020: 355, 三矢 1908: 177)などとされる。これを図解する場合、話し手を低い位置に置くことになるだろう。

4. 実用的な図解

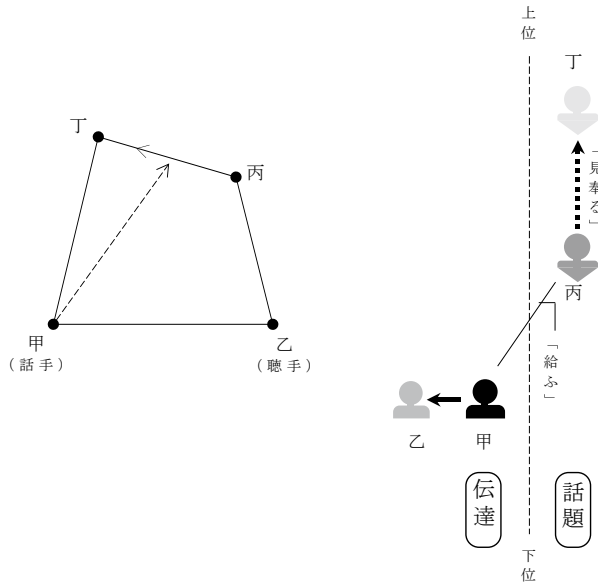
本節では、これまで見てきたことをふまえて、古文の読解に役に立つ、敬語をとらえやすい図解の試案を示したい。

まず、敬語表現の理解が古文の読解に役立つということを確認しておきたい。たとえば、高等学校国語科用教科書には次のようにある。

- (02) 敬語表現を正しく理解することで、書かれていなくても、その動作をする人や受ける人を読み取ったり、登場人物相互の身分関係を把握したりすることができる場合も多い。（『新編国語総合』教育出版 2021: 293）

これは、敬語の使用によって、その文の主語（主体）や補語（客体）がわかる、あるいは、主体（主語）と客体（補語）の身分の上下がわかるということである。この点を考えると、古典敬語の図解に重要なのは、人物の「上下関係」（時枝 2007: 151 のいう「上下尊卑の関係」）を示すことだということになる。

上下関係を重視した敬語の図解に、萩野貞樹の「ハギノ式敬語しくみ図」がある。これは、時枝誠記の敬語論に基づいて敬語を図解したもので、上下関係を明確に示すために、図を縦長にして、右に話題（為手・受け手）を、左に伝達（話し手・聞き手）を置いている。これによって、右側で為手・受け手の間の上下関係が、左側で話し手・書き手の間の上下関係が、左側と右側とで為手・受け手・話し手の間の上下関係が示される。たとえば、時枝の「見奉り給ふ」の図（時枝 2007: 171 による）を「ハギノ式」で図解してみると、図 15 のようになる（萩野 2005: 118 を参考にした）。



[時枝の図]

[ハギノ式]

図15 「丙、丁を見奉り給ふ」の図解

本稿では、この図解にならない、上下関係を明確に表すために、教材類に見られる横中心の図を、縦中心のものに変える。

以下、2節・3節で扱った、尊敬語、謙讓語、丁寧語、二方向に対する敬語（謙讓語＋尊敬語）、二方向に対する敬語（謙讓語＋丁寧語）、最高敬語、絶対敬語、自敬表現（尊敬語）、自敬表現（謙讓語）、自卑表現の図解を試みる。例文は、『新編 日本古典文学全集』（小学館）所収の平安時代の作品からとった（ジャパナレッジ「日本古典文学全集」を利用した）。

(03) くらもちの皇子おはしたり。(くらもちの皇子がいらっしやっ
た)

(『竹取物語』『新編 日本古典文学全集 12』 p.12)

(04) いみじく泣くを見たまふも (ひどく泣くのをごらんになると)

(『源氏物語 若紫』『新編 日本古典文学全集 20』 p.208)

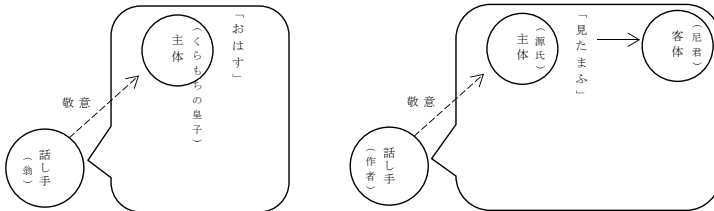


図 16 尊敬語の図解 (例 03・04)

尊敬語には、①主体（為手）のみで、客体（受け手）のいないもの（例 03）、②主体と客体がいるもの（例 04）、の 2 タイプがある。②であって
も、尊敬語では、主体と話し手との上下関係が重要で、主体と客体との上
下関係は、ほとんどの場合、問われない。図では、話し手を下に置き、主
体と客体とを横並びにしてある。聞き手は入れていない（図 17・19・
21・22・23 も同様）。

(05) しかじかと申すに (これこれと申し上げると)

(『源氏物語 帚木』『新編 日本古典文学全集 20』 p.108)

(06) 人々拝み奉る。(人々は拝み奉る)

(『土佐日記』『新編 日本古典文学全集 13』 p.52)

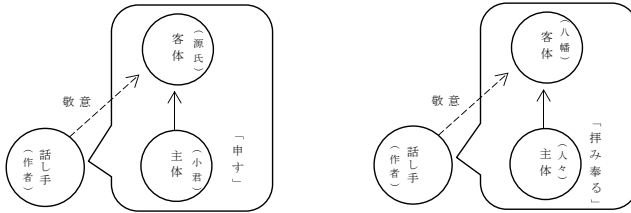


図 17 謙讓語の図解 (例 05・06)

謙讓語は、客体が上位、主体が下位となるため、図では、そのように人物を配置してある。話し手は、主体と同じ下位に置かれる。敬語（動詞）は、主体の近く書き入れてある（図 19・20 も同様）^(注1)。

(07) 学問などしはべるとて（学問などいたそうと）

（『源氏物語 帚木』『新編 日本古典文学全集 20』 p. 85）

(08) 心憂き事の侍りしかば（情けないことがございましたので）

（『枕草子』『新編 日本古典文学全集 18』 p. 157）

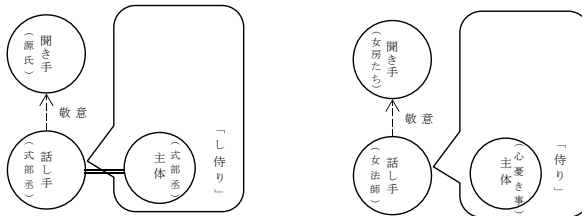


図 18 丁寧語の図解 (例 07・08)

平安時代の「侍り」は、へりくだり、かしこまりの気持ちを表し、「話し手 = 主体」の場合（例 07）や、事柄が主体（主語）の場合（例 08）に使われる。図では、話し手と主体とを下に置き、聞き手を上に置いている。

(09) 朝廷に御文奉りたまふ。(帝にお手紙を書き申しあげる)

(『竹取物語』『新編 日本古典文学全集 12』 p. 74)

(10) 「……」など聞こえたまふ。(「……」などとお申しあげあそばす)

(『源氏物語 紅葉賀』『新編 日本古典文学全集 20』 p. 313)

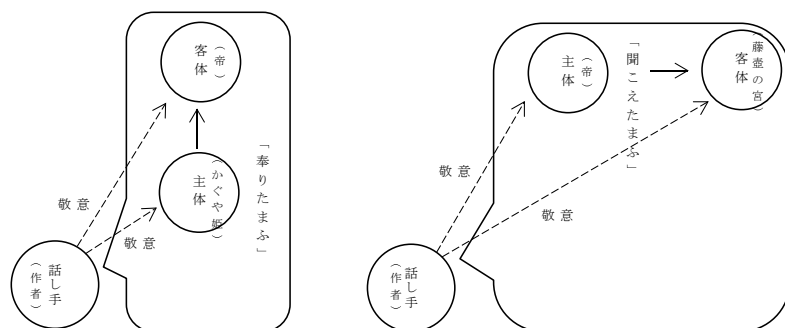


図 19 二方向に対する敬語（謙讓語 + 尊敬語）の図解（例 09・10）

「謙讓語 + 尊敬語」は、話し手から見て、主体と客体がともに身分が高い場合に使用される。図では、話し手を最も下位に置いている。この表現は、下位者から上位者への動作（下位者が主体，上位者が客体）に使われることが多いが（例 09），上位者から下位者への動作（上位者が主体，下位者が客体）に使われることもある（例 10）。例 09 は，主体が「かぐや姫」，客体が「帝」なので，両者を上下に配置してあるが，例 10 は，主体が「帝」，客体が「藤壺の宮」なので，横並びにしてある。

(11) かく申しはべらむ（そのように申しましょう）

(『竹取物語』『新編 日本古典文学全集 12』 p. 57)

(12) さるよしをこそ奏しはべらめ（その旨をば奏上いたしましょう）

(『源氏物語 夕顔』『新編 日本古典文学全集 20』 p. 175)

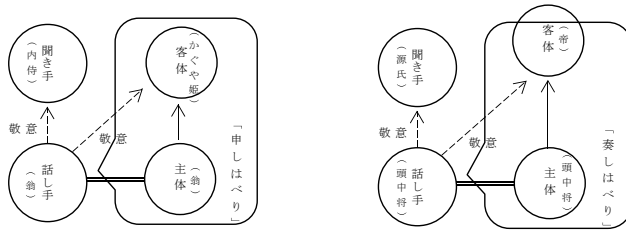


図 20 二方向に対する敬語 (謙讓語 + 丁寧語) の図解 (例 11・12)

「謙讓語 + 丁寧語」は、丁寧な表現で、主に話し手の動作に使われる。図では、「話し手 = 主体」を下位に置いている。例 12 では、「絶対敬語」の「奏す」が用いられているため、図では、客体の位置を上げて、吹き出しからはみ出させてある。

- (13) 宮に入らせたまひぬ。(離宮にお入りになった)
 (『伊勢物語』『新編 日本古典文学全集 12』 p. 185)
- (14) 端近くおはします。(端近な所においでになる)
 (『枕草子』『新編 日本古典文学全集 18』 p. 105)

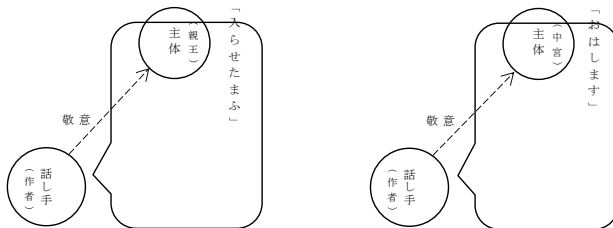


図 21 最高敬語の図解 (例 13・14)

「せたまふ」、「おはします」は、最高位の人物の動作・状態に使われる。図では、最高位である主体の位置を上げて、吹き出しからはみ出させてある。

(15) この由を奏す。(このようすを奏上する)

(『竹取物語』『新編 日本古典文学全集 12』 p. 58)

(16) あしぎまに啓す。(悪く申しあげる)

(『枕草子』『新編 日本古典文学全集 18』 p. 105)

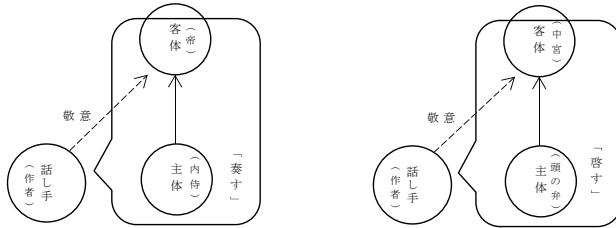


図 22 絶対敬語の図解（例 15・16）

最高位の人物を客体とする「絶対敬語」には、「奏す」（天皇に申しあげる）、「啓す」（中宮・上皇・皇太子などに申しあげる）がある。図では、最高位である客体の位置を上げて、吹き出しからはみ出させてある。話し手は、主体と同じ下位に置かれる。

(17) などか賜はせざらむ。(必ず賜わせるぞ)

(『竹取物語』『新編 日本古典文学全集 12』 p. 59)

(18) かぐや姫奉れ。(かぐや姫を献上せよ)

(『竹取物語』『新編 日本古典文学全集 12』 p. 58)

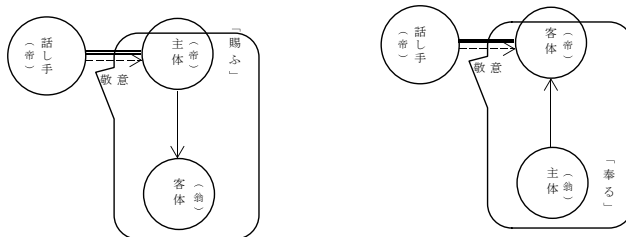


図 23 自敬表現の図解（例 17・18）

話し手が自身に対して敬語を使う「自敬表現」には、自身の動作に尊敬語を使うもの（例 17）と、他から自分に向かう動作に謙譲語を使うもの（例 18）とがある。自敬表現は、「帝など特に身分の高い人物の会話文に見られる」（沖森 2012: 130）ので、図では、「話し手 = 主体」、あるいは、「話し手 = 客体」を最上位に置いている（吹き出しからはみ出させてある）。

(19) 堪へがたう思ひたまへつる（堪えがたく存じておりました）

（『枕草子』『新編 日本古典文学全集 18』 p. 462）

(20) 仮名文見たまふるは（仮名文を見せていただくのは）

（『源氏物語 若菜上』『新編 日本古典文学全集 23』 p. 113）

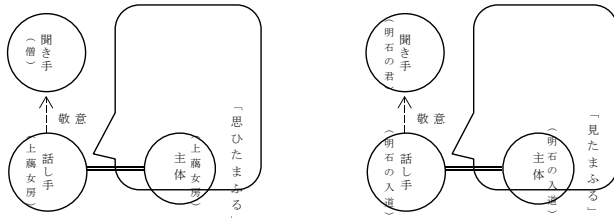


図 24 自卑表現の図解（例 19・20）

「給ふる」（下二段活用の「給ふ」）は、へりくだり（自己卑下）を表す補助動詞とされる。図では、「話し手 = 主体」を最下位に置いている（吹き出しからはみ出させてある）。

5. おわりに

本稿では、古文敬語の図解法について、市販の教材類に見られるものを概観し、古文を読むことを考えた場合、どのように図解すれば敬語がとらえやすくなるのかについて検討し、図解法の試案を示した。

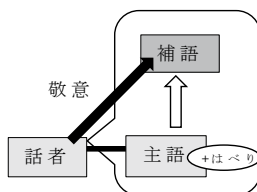
その図解法の試案を考えるに当たり重視した点は、次のとおりである。

- (1) 身分の上下や敬語の使い方に合わせて、関係する人物を上下に配置する。
- (2) 敬意の対象となる人物を、話し手の上位に配置する。

(1)は、身分の上下が敬語の使用に反映することを示すためであり、(2)は、どの人物に敬語を使うか（上位に待遇するか）を示すためである。

（原稿受付 2022年10月26日）

注1 森山（2022: 33）に、これとほぼ同じ図解（「補語尊敬（謙讓語）」の「はべり」の図解）が示されている（補助動詞の「はべり」の図解で、「話者＝主語」になっている）。



参照した教材類（敬語の図解のあるもの）

- 青木五郎・武久堅・坪内稔典・浜本純逸監修（2012）『クリアカラー 国語便覧 第四版』数研出版
- 市川孝・山内洋一郎監修（2018）『三版四訂 古文読解のための 標準古典文法』第一学習社
- 市川孝・山内洋一郎監修（2020）『三訂版 楽しく学べる 基礎からの古典文法』第一学習社
- 荻野文子（2010）『新修 古典文法 二訂版』京都書房
- 沖森卓也編、山本真吾・永井悦子（2012）『古典文法の基礎』朝倉書店
- 井口時男ほか編（2020）『国語総合』教育出版（2016 検定済）
- 影山輝國ほか編（2021）『新編国語総合』教育出版（2016 検定済）
- 北原保雄編（1992）『古典にいざなう 新古典文法』大修館書店
- 北原保雄監修（2021）『精選 国語総合 新訂版』大修館書店（2016 検定済）

- 田辺正男（1986）『新訂 古典文法』大修館書店
塚原鉄雄監修，鈴木豪，岩田晋次編（2010）『高校生の 古典文法 六訂版』京都
書房
中村幸弘（1992）『生徒のための 古典読解文法 改訂版』右文書院
中村幸弘編（2007）『ベネッセ全訳古語辞典 改訂版』ベネッセ
林巨樹・安藤千鶴子編（2017）『新全訳古語辞典』大修館書店
宮腰賢・石井正己・小田勝編（2021）『旺文社図解全訳古語辞典』旺文社

参考文献

- 穂田定樹（1976）『中古中世の敬語の研究』清文堂出版
石坂正蔵（1944）「書紀古訓の「ハヘリ」「ハムヘリ」の解釈」『敬語史論考』大
八洲出版 287-319（初出 1933）
大石初太郎（1983）『現代敬語研究』筑摩書房
小田勝（2015）『実例詳解 古典文法総覧』和泉書院
小田勝（2020）『古代日本語文法』筑摩書房（初刊 2007）
小田勝（2022）「古典敬語の特質と関係規定語の問題」近藤泰弘・澤田淳編『敬
語の文法と語用論』開拓社 90-112
北原保雄（1996）『表現文法の方法』大修館書店
金田一京助（1942）『国語研究』八雲書林
櫻井光昭（1983）「古代敬語試論」『敬語論集：古代と現代』明治書院 1-23（初
出 1965）
澤田淳（2022）「日本語敬語の運用に関する語用論的研究：相対敬語の類型化を
もとに」近藤泰弘・澤田淳編『敬語の文法と語用論』開拓社 114-182
杉崎一雄（1971）「源氏物語の敬語法」山岸徳平・岡一男監修『源氏物語講座
第七巻 表現・文体・語法』有精堂出版 333-355
杉崎一雄（1994）「古典の敬語のしくみ 古典の敬語の種類と働き」『国文学 解
釈と教材の研究』39-10 学燈社 18-25
玉上琢彌（1959）「源氏物語の敬語法」『講座解釈と文法 3 源氏物語・枕草子』
明治書院 206-235
玉上琢彌（1966）「敬語と身分：八代集の詞書を材料に」『源氏物語研究 源氏物
語評釈 別巻一』角川書店 28-29（初出 1939）
辻村敏樹（1967）「敬語の分類について」『現代の敬語』共文社 101-114（初出
1963）
辻村敏樹（1992）「敬語分類の問題点をめぐって」『敬語論考』明治書院 88-103
（初出 1988）

- 時枝誠記（2007）『国語学原論（下）』岩波書店（初刊 1941）
- 時枝誠記（2020）『日本文法 口語篇・文語篇』講談社（初刊 1950・1954）
- 永田高志（2001）『第三者待遇表現史の研究』和泉書院
- 中村幸弘・大久保一男・碁石雅利（2002）『古典敬語詳説』右文書院
- 西田直敏（1987）「敬語」山口明徳編『国文法講座 第2巻 古典解釈と文法 活用語』明治書院 97-138
- 西田直敏（1989）「古典敬語のメカニズムはどうなっているか」（敬語セミナー A-Z）『国文学 解釈と教材の研究』33-15 学燈社 102-110
- 西田直敏（1998）「敬語 = 人の関係は敬語で分かる（ex「とくこそ試みさせ給はめ」：源氏物語・若菜）『国文学 解釈と教材の研究』43-11 学燈社 78-84
- 根来司（1991）『源氏物語の敬語法』明治書院
- 萩野貞樹（2005）『ほんとうの敬語』PHP 研究所
- 松下大三郎（1928）『改撰標準日本文法』紀元社
- 馬淵和夫（1963）『古文の文法別記』武蔵野書院
- 三矢重松（1908）『高等日本文法』明治書院
- 宮地裕（1981）「敬語史論」森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川村善明編『講座日本語学 9 敬語史』明治書院 1-25
- 森一郎（2010）「源氏物語の語りの表現法：敬語法を中心に」『源氏物語の方法と構造』和泉書院
- 森野宗明（1971）「古代の敬語Ⅱ」『講座国語史 5 敬語史』大修館書店 97-182
- 森山由紀子（2010）「現代日本語の敬語の機能とポライトネス：「上下」の素材敬語と「距離」の聞き手敬語」『同志社女子大学日本語日本文学』22 同志社女子大学日本語日本文学会 1-19
- 森山由紀子（2013）「敬語史」木田章義編『国語史を学ぶ人のために』世界思想社 185-214
- 森山由紀子（2022）「平安和文における素材敬語と対者敬語の「意味」：語用論的意味の違いを端緒として」『日本語学会 2022 年度秋季大会予稿集』日本語学会 31-36
- 山田孝雄（1924）『敬語法の研究』東京宝文館
- 渡辺英二（1981）「敬語史論」宮地裕ほか編『講座日本語学 9 敬語史』明治書院 140-164

使用データベース類（最終閲覧は 2022 年 10 月）

「国立国会図書館デジタルコレクション」国立国会図書館

<https://dl.ndl.go.jp/>

「ジャパナレッジ」 ジャパナレッジ

<http://japanknowledge.com>